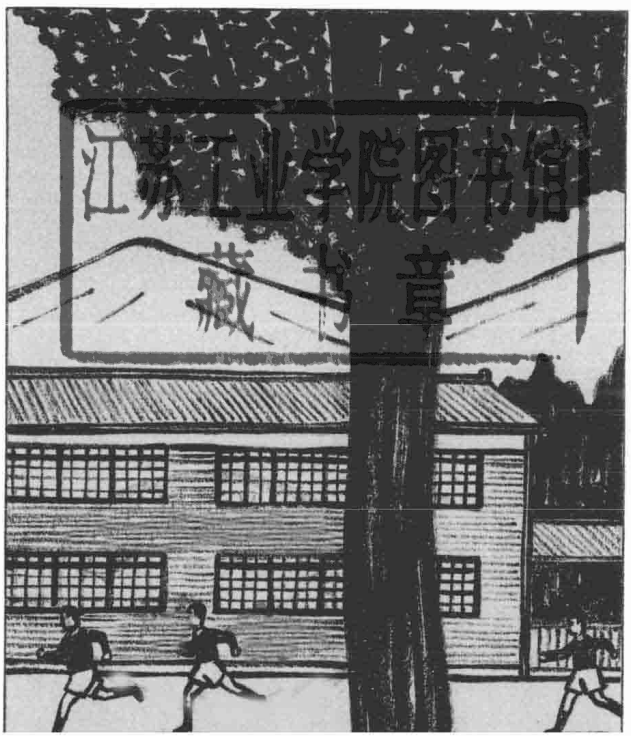
# 那珂川青春記

森 詠

# 那珂川青春記

森 詠



江苏工业学院图书馆
藏书章

森　　詠（もり・えい）

1941年、東京生まれ。東京外国語大学イタリア語科卒。日本文芸家協会・日本推理作家協会・日本冒険作家クラブ会員。82年、『燃える波濤』で第1回日本冒険小説協会特別賞、95年、『オサムの朝』で第10回坪田譲治文学賞受賞。主な作品は『日本封鎖』『さらばアフリカの女王』『振り返れば、風』『ナグネの海峡』『午後の砲声』『夏の旅人』『嘆きの峠』『日本朝鮮戦争』『青龍、哭く』など多数。ラグビーチーム「ピンク・エレファンツ」の会長を務める。

那珂川青春記
1998年11月20日　初版第1刷発行
1998年12月10日　初版第2刷発行

著　者　森　　詠
発行者　黒木重昭
発行所　株式会社　小学館
〒101-8001　東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話　編集　03（3230）5132
制作　03（3230）5333
販売　03（3230）5739
振替　00180-1-200
印刷所　図書印刷株式会社

■Ⓡ本書の全部または一部を無断で複写（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター（☎03-3401-2382）にご連絡ください。
■造本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、「制作部」あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。

ISBN 4-09-387262-7　©Ei Mori　1998　Printed in Japan

# 那珂川青春記

## 目　次

裏切り同盟　6
ラ式蹴球部　30
ブッコミ　55
度胸試し　79
文化祭　104
豪傑校長　128

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

キャンプ合宿　152
喧嘩体育祭　178
ラグビー決戦　202
青年将校　230
冬来たりなば　254
旅立ち　281

装丁・装画　峰岸　達

# 那珂川青春記

# 裏切り同盟

朝の硬い陽光が、霜の降りた道に斜めから射しこんでいた。道端や畑の表土を押し上げた霜柱が、鮮烈な光を浴びて水晶のように輝いている。

茂は白い息を吐きながら、学校への道を急いだ。高下駄の歯が凍(い)てついた道に甲高い音をたてた。

「オッス」「オッス」

学校の正門には生徒たちの群が流れも切れずに押し寄せていた。茂はいち早く竹井光二を見つけて、挨拶(あいさつ)を交わした。

竹井も裸足(はだし)で高下駄を履いている。茂は冷たくて足の指の感覚が無くなりかけていたが、手で擦(こす)ってはがまんをしていた。

「心頭滅却すれば、冬また涼しだ」

茂は折しも傍を通りかかった四組の長峯良子に聞えるような大声でいった。良子は紺のコートを着こみ、真っ白なマフラーを首に巻いていた。学年一の美少女と評判の女子高生だ。

良子は茂と竹井の高下駄に一瞥を投げたが、「バカみたい」といった顔をし、さっさと通り過ぎて行った。

茂と竹井は急に寒さが増したように感じ、肩をすぼめて足踏みをした。

すぐ気を取り直し、「男道、男道」と念仏のように唱えた。

茂が男になりたいと思ったのは、多分に父のせいだった。父の大山作造は売れない小説家で詩人だ。小説家・詩人とは聞いていたが、茂自身はまだ一度も父の作品を目にしたことがない。母によれば、函館にいる頃は、結構いい作品を書いていて、北海道文芸界の新人として注目されたそうだ。一念発起して上京したものの、東京では父の作品は話題にもならず、結局は食いつめて母の実家がある黒磯町に引っ込んでしまった。

函館時代には市役所勤めの公務員だったから詩や小説を書いていても給料が貰えるので暮らしは成り立ったが、いまはそうではない。もともとが働くことが嫌いな人間なので、毎日、旅館の調理場で仲居として働く母から金をせびっては、酒を呑んだくれていた。

母ははじめのうちこそ、稼ぐのは自分がやるから、あなたは小説や詩を書けと父を励ましていたが、書く書くと大言壮語ばかりして一行も書こうとしない父に、いつしか愛想をつかしたらしい。

そのうち父はふらりと家を出たきり、行方知れずになってしまった。噂によると町の酒場の女

とどこかに駈け落ちしたということだ。それ以来、母は兄の誉と茂にすべての希望を託するようになった。毎日のように茂は母から「父さんのようにだらしない男になっては駄目よ」「女を泣かすような恥知らずの最低な男になってはいかんよ」と聞かされた。

茂は、そんなことはいわれなくても父のような小説家とか詩人といった軟弱な仕事には就くまいと誓っていた。それよりも、もっと男らしい仕事をしたい。

「シゲル、聞いたか？　薄葉たちのこと？」

竹井はポケットに両手を突っこみ、足踏みしながらいった。

「何だ？　聞いてねえ」

「昨日の放課後、薄葉たち、青年将校にとっつかまって、保健室に連れて行かれ、バリカンで丸坊主にされちまったってよ」

薄葉は二年三組のワルだ。学校で番を張っているのは三年生の近藤というワル中のワルだが、薄葉はその一の子分を自称している男だ。茂たちが三年生になったら、薄葉は近藤の跡目を継ぐつもりらしいが、風格に欠け、番長には程遠い貧相な男だった。

「だらしねえ奴やな。何の抵抗もしなかったのか？」

「あいつが抵抗しっこあんめえ。裏じゃ、青年将校とつるんでんだからな」

竹井はわけ知り顔でいった。竹井はどこから聞いてくるのか、その種の裏情報に詳しい。竹井の父親は東京の新聞社の通信員をしており、その血を引いているのだろう。

〝青年将校〟というのは生活指導の大野という教諭の仇名である。大野は元陸軍士官学校在学中



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に戦争が終ったとかで、戦後、飯を食うために社会科教師になった。軍隊仕込みのビンタをくれ、生徒たちをまるで一兵卒か部下のように扱っていた。講堂の掃除にしても、体育祭の行進でも、軍隊式にやるのが好きで、自分は指揮官のように号令をかけて悦にいっている。そうしたことから、茂たちは〝青年将校〟の称号をたてまつった。

〝青年将校〟は赤ら顔をした大酒呑みでも有名だった。生活指導のためと称してはワルの家庭に押しかけ、酒を御馳走になるということもしょっちゅうしているらしい。竹井がワルの連中から聞きこんだのだから本当の話にちがいない。

「あいつら腹をくくって髪を伸ばさねえから、そんな目に遇うんだ」

「ああ、もともと度胸のねえ連中だからな」

竹井は思い切り洟をすすった。

茂たちの通う県立黒磯北高は、伝統的に男子生徒は坊主頭と決まっていた。だが、それが学校の規則になっているのか、というとそうではなく、生徒手帳には坊主頭にすべしとは一言も記されていない。服装や履物にしてもそうで、生徒心得第二条には、ただ「高校生にふさわしい服装にすべし」とあるだけだ。

「高校生にふさわしい」とはどういうことか？　学校側はその解釈を、男子は坊主頭に学生服、黒い短靴か運動靴、女子はセーラー服に膝が隠れる長さのひだスカート、白ソックスとした。

それに対して、茂たちは生徒の意見も聞かず勝手に教師たちだけで決めたのは民主的ではないといい出し、この秋から床屋にも行かず髪を伸ばしはじめ、靴もやめて高下駄に替え、登校し出

したのだ。
正直にいえば、茂は月々の小遣いから床屋代分をチョロまかすためで、さらにいえば、エルヴィス・プレスリーのようなリーゼント・スタイルの髪形に憧れたからだ。自分も早く髪を長く伸ばし、ポマードをこってり塗って後ろに撫でつけ、ギター片手に『ハート・ブレイク・ホテル』を唄うのを夢見ていた。
竹井は熱烈な裕次郎ファンで、流行の裕次郎刈りができるくらいに髪を伸ばしたいと思っていた。
茂も竹井も口にこそ出さなかったが、共通していたのは女の子の注目を引きたい一心だった。他の男とは違うことをやってみたい。女の子の注目を浴びたい。そういう切なる願いの点では、他の三人、青木正も八木沢進も川上徹郎も大同小異だったろう。
茂たち五人は、大学進学を目指す進学クラスである二年五組の同級生だった。受験までまだ一年以上あるというのに、学校側は茂たちを受験勉強に追い立てていた。栃木県の田舎の高校から都会の大学に入学するのは容易なことではない。茂たちも頭では分かっていたが体の内部にあるもやもやとした反抗心が、どうしても頭をもたげてしまい、素直に勉強する気にならなかった。
女の子にもてるのには、手っ取り早く目立つことだ。それにはバンカラで行こう、といい出したのは青木だった。青木は米屋の息子で、五人の中では一番のオトナだった。文学青年で、茂が読んだことがないスタンダールとか、ニーチェとかを振り回し、文学論を展開しては茂たちを煙に巻いた。

青木は佐藤紅緑の『あゝ玉杯に花うけて』のような、旧制高校生の弊衣破帽に高下駄でいこうというのだ。破帽は、わざわざ学帽を切り裂き、縫い合わせ、靴墨を塗りつけてテカテカに光らせるのだが、茂たちは見るからに汚そうだったので反対した。学生服をボロにして着るのも、問題はなかった。茂たちの学生服は一年中着たきり雀のボロだったからだ。

高下駄に一も二もなく賛成したのは、五人の中で一番チビの茂だった。同級生の女の子の中には、茂よりも背が高い女子がいて、常々、屈辱感を抱いていた。そして、全員がこぞって賛成したのは、革靴を買うよりも高下駄は安かったこともある。靴を買うといって親から貰った金の大半をくすねて遊ぶ金に回すことができる。

破帽はやらないので多少中途半端ではあったが、旧制高校生を気取ったバンカラ風スタイルならば、学校のいう「高校生にふさわしい服装」にもはずれないはずだ。

学校側は進学クラスの五組から、〝校則〟に反する五人が出たことに虚を衝かれた。黒磯北高校では一学年五クラス編成なのだが、そのうち一組が家庭科女子、二組と三組が就職志望者の商業科、四組と五組が普通科で進学志望者クラスになっていた。

同じ進学クラスでも、四組は一般私大・短大向きに対し、五組は国立大と一流私大向けとなっており、比較的成績の上位の者が五組に集められていた。学校は、五組の生徒たちを特別扱いして受験勉強させ、有名大学に多数を送り出し、県北一の進学校にのし上ろうとしていた。

そのため、一組から四組までは一クラス五十人以上の編成なのに、五組だけは三十人編成にした上に、他のクラスから隔離するかのように別棟の理科実験教室に押しこめた。理科実験教室か

ら一般校舎に行くには、いったん職員室のある棟を通らねばならず、五組の生徒はたえず教師に監視されているような状態に置かれていた。これは五組の生徒が合同授業以外には他の組の生徒たちと往き来できないようにして、就職組に巣喰うワルたちの影響を受けたり、勉強の邪魔をされないようにとの配慮だったらしい。

茂たちにすれば、そうした特別扱いされるのが嫌でたまらなかった。最も我慢がならなかったのは、五組の三十人中、女子がたったの十人しかいないことだ。他の組は、家庭科クラスが全員女子だったし、クラスの半分以上女の子だった。

他の組では熱烈なカップルが誕生しているというのに、五組は受験優先ということで、男女のつき合いもままならなかった。これでは、あまりに不公平ではあるまいか？　茂たちの欲求不満は、つまるところ女の子が少なすぎるという不平等に根差していた。

バンカラを開始してすぐに茂たちは全員、高田教頭や青年将校に職員室へ呼び出され、頭髪を刈れとか、高下駄を止めて靴を履いて来いと御説教された。茂たちも黙ってはいなかった。

「髪を長くすんのは、転んだり、物が上から落ちて来た時、衝撃を少なくするためだっぺ。高下駄にすんのは、足に水虫ができて痒くてたまんねえからだ。それにわしらは日本人として古来からの伝統文化である下駄を大切にすっぺと思って履いてんだ」

「屁理屈こいて、髪さ長くすんのは、色気づいたからだんべ。そんなに女の子とつき合いたいか？」

教頭や青年将校は真っ赤になって怒る。

「先生ら髪を長くしてんのも、色気づいているからけ？」
「大人は違うんだ！　おまえらはまだ未成年者だ。まして学校に居るうちは、学校の決まりに従わにゃいかん」
「校則のどこに、坊主刈りにしろ、下駄履いてはいかん、と書いてあるのですか？」
「高校生にふさわしい服装をすべし、とあっぺ。おまえらの格好は薄汚くて、ムサ苦しいんだよ」
「じゃあ、先生。旧制高校生の弊衣破帽は、薄汚くてムサ苦しいから高校生らしくないっていうんですか？　バンカラはいかんのですか」
茂たちは校長室にも聞えるような大声で反論する。校長の茨城先生が旧制高等師範の出で、剣道五段、学生時代にはバンカラで鳴らしたことを知っていたからだった。
「おまえら本当にバンカラでやっているのか？」
「もちろんだあ。わしらは、こう見えても熱血硬派だっぺ。色気づいたなんぞといわれるのは片腹痛かっぺな」
茂たちも本心では硬派でも何でもなかったのだが、口々に反論しているうちに成り行きで、硬派宣言を口走っていた。
教頭や青年将校の価値観では、硬派は軟派よりもまだ良かったのだろう。二人は半信半疑の面持ちながら、茂たちの屁理屈と頑固さに根負けして茂たちを無罪放免した。
竹井の聞きこんだ話では、学校内部で武断政治を敷こうとする高田教頭や青年将校ら強硬派に

対し、担任の高崎教諭や数学の小出教諭ら文治派が批判的な立場をとっており、茂たちが受験に打ちこむためには、多少の逸脱行為は認めるべきだと主張しているのも有利に働いたらしい。

さらに、茨城校長が職員室での教頭・青年将校と茂たちの議論を隣の校長室で耳にしていたらしく、「あいつら見どころがある」といってくれたことが功を奏していた。

五組の茂たちの長髪に便乗したのが、三組を中心とした薄葉たちだ。その薄葉たちが、とうとう青年将校に捕まって強制的に坊主頭にされてしまった。自業自得である。

茂はあまり薄葉たちに同情しなかった。薄葉たちは学生ズボンを細身のマンボズボン風に仕立て直し、ピカピカに磨いたエナメル光沢の革靴を履いて、長髪にポマードを塗り、女の子たちをナンパしていたからだ。

「お、来たぞ」

竹井は背後に顎をしゃくった。ボサボサ頭に学帽をちょこんと載せてやって来る青木、川上、八木沢の三人の姿が見えた。いずれも高下駄を履き、ガニ股開きで歩いて来る。高下駄はしばらく履いていると、歯の外側が先にすり減り、ますますガニ股の格好が板についてくる。みんなは口々に挨拶した。

「オッス」「オッス」「メッス」

互いにじろりと相手の格好をチェックし合い、男の盟約を守っているのを確かめた。

「本当に寒いな」「寒びい、寒びい」

「早く教室へ行って、暖ったまっぺ」



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com